

巻 頭 言



岩手県知事 達増 拓也

岩手からポストコロナ時代の世界に向けて

はじめに、今般の令和6年能登半島地震で犠牲になられた方々に心からお悔やみ申し上げますとともに、被害に遭われた皆様にお見舞い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響により、人の往来を伴う交流が困難な状況が続いてきましたが、令和4年から渡航制限の大幅な緩和が進み、岩手県においても様々な国際関連業務が再開されています。

コロナ禍により海外渡航が叶わない中でも、オンライン商談などの新たな販売促進策を講じ、農林水産物など県産品の輸出は総じて堅調に推移してきましたが、更なる販路拡大のため、令和4年12月のカナダに続き、昨年12月にはマレーシア、シンガポールにおいてトップセールスを実施しました。現地へ赴き、実際に関係者から直接声を聴くことにより、食や観光、文化など様々な面で、海外での日本の存在感の高まりを実感したところです。

コロナ禍で一時減少に転じたものの、県内の在留外国人数も再び増加しているほか、岩手県八幡平市にイギリスの名門校であるハロウインターナショナルスクールが日本で初めて開校するなど、県内での国際化も進展しています。

人口減少が進む岩手県において、外国人県民は重要なパートナーです。岩手県は、多文化共生の推進に向けて、令和元年に「いわて外国人県民相談・支援センター」を設置し、外国人相談体制や情報提供体制の充実を図るとともに、令和4年には「岩手県における日本語教育の推進に関する基本的な方針」を策定し、日本語教育の推進に取り組んでいます。

そして、令和5年1月には、ニューヨーク・タイムズ紙の「2023年に行くべき52カ所」において、岩手県盛岡市が2番目に選ばれました。景観はもちろん、住民や生活文化の豊かさが高く評価され、国内外の人々が岩手に関心を持つ契機となりました。その波及効果はとて大きく、盛岡市を中心として岩手県全体の外国人観光客数は目に見えて増加しています。また一方で、これまで日本国内で見過ごされがちだった地方の良さを改めて発信する機会でもあり、地方を大事にする新しい日本の在り方を岩手がつくっていくことにつながるとも感じています。

岩手県奥州市出身の大谷翔平選手などの活躍と相まって、岩手が注目されるこの機会に、岩手県の持つ価値や魅力を全国、海外の人と共有するため、今こそ岩手が世界に打って出るときであると考えています。

ポストコロナの時代にあって、世界的な貿易や観光は、今後さらに回復していくと予測されています。

今後も、関係する様々な主体と緊密に連携しながら、輸出の促進やインバウンドの拡大を図るとともに、増加する外国人県民が暮らしやすい環境づくりを車の両輪として、岩手を世界に大きく開いていきたいと考えています。